

朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のプローチ 47〉 junaida

◆高山れおな選

- ロケットに春愁のありまた翔べず (和歌山県上富田町) 森 京子
- くつひもをゆるめるやうに水温む (藤井寺市) 横内 正人
- シクラメン全部ぬらして春の雨 (松山市) 小谷 正和
- ぴったりのジーンズ買って春を待つ (丸亀市) 布戸 道江
- コサイージュを互いに直し卒業す (松山市) 中矢 尚
- 啓蟄や弱虫泣き虫保育園 (横浜市) 廣澤 行紀
- ハイエナはハイエナ科なり春の塵 (松原市) たりりずむ
- 季語といふ光に焼かむ雪写真 (市川市) をがはまなぶ
- 鱈酒にうかと駄作を披露せし (戸田市) 蜂葉 厚子
- 東京に背中を向けて表を踏み (香川県琴平町) 三宅久美子

【評】森さん。H3にカイロスと、打ち上げ失敗のニュースが続く。その結果としての春愁をむしろ原因であると転じたわけだが…。横内さん。靴紐が的確。ネクタイだと水温が上がり過ぎ。小谷さん。「全部」が良い。たくさんの花が見える。

◆小林貴子選

- 下校児のでたらめの歌春の土手 (袋井市) 本多 りつ
- 啓蟄や蟻語のわかる山田君 (船橋市) 武藤みちる
- 春休み中洲は俺たちの島だ (日光市) 土屋 恵子
- 十五年(ころ)のままふ流し雛 (横浜市) 三玉 一郎
- たいへいよう三月十一日の今日 (富谷市) 川村 空也
- 道具持つ手つきのままに纏納 (東かがわ市) 丸山 靖子
- 毎日(は)開かぬ小店舞踊る (多摩市) 田中 久幸
- 恋と言ふ呪文のありて春めぐる (三重県明和町) 西出 泥舟
- 風が突く機嫌悪そな春一番 (さいたま市) 田中 彼方
- けぶるごと春は来るなり八ヶ岳 (静岡県東伊豆町) 小沢 勝正

【評】一句目、既成のメロディーではない歌が、子どもの口について出る。春を迎えて心が弾む。三句目ともども、子どもは天才だ。二句目、この山田君に通訳を務めてもらい、蟻の気持ちを聞いてみたい。四・五句目、三・一から十五年。

◆長谷川權選

- 春分(の)光と闇が分かつ星 (豊前市) 三原 逸郎
- 歌壇俳壇花壇仏壇春来る (茅ヶ崎市) 加藤 西葱
- 春の夜の夢とは知らず政 (八王子市) 額田 浩文
- 大空の全てが春の大気かな (太田市) 岡島要二郎
- 鶴引いてどげうの寝息安からむ (福岡市) 高山 國光
- もう誰もゐない落の桜貝 (那須塩原市) 後藤 博美
- 海風舟海の面にへばりつく (西海市) 前田 一草
- 春の夜の重き蒲団を重ねたる (神奈川県松田町) 山本けんえい
- 龍太(の)土にまみれしことばあり (横浜市) 三玉 一郎
- 麗かやゲートボールのボール立つ (所沢市) 堀 正幸

【評】一席。昼と夜、光と闇、喜びと悲しみ……。地球の姿を宇宙の目で詠む。二席。仏壇と並べたところに拍手。うららかな光景。三席。「春の夜の悪夢」といいたいところ。つかの間の夢？ 十句目。一本の棒ののどかさよ。これも春の力。

◆大田 暉選

- 足跡を足跡が追ふ節二編 (あきる野市) 松田 明香
- 啓蟄や嫩新しき余生かな (広島市) 谷脇 篤
- 少女には戻れぬ空へ軟糖滑る (松山市) 西本 千尋
- 死に近き母と見てゐる春の虹 (大村市) 小谷 一夫
- 山笑ふ鐘の鳴る丘鐘鳴らす (新庄市) 丸山 鏡子
- 杖をつく人と連れ添ふ花見かな (野田市) 塚野公博音
- 動物園は気配に満ちて黄砂降る (長岡京市) 水口 大介
- 映画でふトンネル抜けて春の雪 (市川市) をがはまなぶ
- 忘れぬあの日あの時春の海 (筑紫野市) 二宮 正博
- 怒鳴られて水かけられて猫の恋 (羽島市) 緒方 房子

【評】第1句。親子の足跡だろうか、それとも友達同士の足跡だろうか。楽しい光景が目に見え。第2句。「嫩新しき」がポジティブで心地よい。余生を静し静しましょう。第3句。少女の頬を思いながら高高とぶらんこを滑っている。懐かしい。

俳句時評 二つの子規句集

岸本 尚毅

復本 一郎選『新選 正岡子規俳句集』が刊行された。岩波文庫では一九四一年初版の高橋虚子選『子規句集』以来、八十五年ぶりの子規句集だ。虚子は改造社版全集の二万八千余句から二・三〇六句、復本は講談社版全集の二万三千余句から一五八三句を選んだ。子規の膨大な句を厳選した句集には選者の俳句観が自ずと投影される。たとえは子規の代表句「鶏頭の十四五本もありぬべし」を虚子は採らなかつた。

このことも含め、この句の評価は後に議論になった(いわゆる「鶏頭論争」)。復本選も興味深い。たとえば「壺丸の垢取る冬の日向哉」は病人子規の自嘲めいた自画像か。ただの滑稽句とも思えない。この句を虚子は採らなかつた。子規が一八九六年(明治二九)に詠んだ蚊遣の句は二十二句。うち虚子選は「旅籠屋の飯くふそばに蚊遣哉」など四句。復本選は虚子も採った「旅籠屋の」

句は虚子も復本も採っている。(俳人句。前書に「妖怪体」とある「赤子煮え居る」を、虚子は採らなかつた。いつぱう虚子が採った「蚊遣火や老母此頃わつらひぬ」を、復本は採っていない。虚子選の基調には「花鳥諷詠」という俳句観があった(『子規句集』解説・坪内檢典)。いつぱう「壺丸の垢」や「赤子煮え居る」を採った復本は江戸俳諧の研究者であり、虚子に逸した滑稽句などの子規俳句の多様性に目を向けた。寒川風骨編『古今滑稽俳句集』に採録された「内のチヨマが隣タマを待つ夜かな」は猫の恋を詠んだ愉快な句。この句は虚子も復本も採っている。(俳人

梶原さい子著「震災短歌ノート」 朝日新聞みちのく歌壇選者の著者が震災に関わる短歌についての論考やエッセー、講演録、聞き書きなどをまとめた一冊。(短歌研究社・2750円) 穂村弘著「短歌の話は長くなる」 『NHK短歌』誌上の対談連載をまとめた第2弾。対談相手として朝日歌壇の常連投稿者・松田梨子、わこさんも登場。(NHK出版・2200円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

風信

